No. ２ : 加速する円安と原油高

円安である。香港の通貨は香港ドルだが、米ドルと連動する仕組みのため、円安・ドル高は香港でも同様。この数カ月は１香港ドルあたり 20 円台。１年前は 18 円台、５年前は 14 円台だった。５年前は 700 香港ドルに相当した１万円は、今や 500 香港ドル。経済に疎い私でも分かる。円の価値は５年前と比べ約３割も下がった。

追い打ちをかけるのが原油高。燃油サーチャージが高騰し、航空券代が上昇している。香港の大手航空会社では、５月から日本―香港間のそれが２倍となった。世界一高いともいわれる香港のガソリン価格は、ついに１リットル 660 円に達した。当然、さまざまなコストに跳ね返るだろう。円建て予算の当事務所の運営にも逆境でしかないが、それだけの話ではない。

日本産食品を多く扱う香港大手事業者では、原油高の影響が顕著だ。輸送コストの増加に加え、原材料費や生産コスト、関連製品の値上げなど、今後の見通しも立てにくいという。香港内の報道によれば、多くの企業が原油高騰は今後数カ月、あるいはさらに長期化すると、厳しい見通しを示している。

どの国・地域でも似た状況だろうが、香港は日本からの食品輸出先として世界第２位の地域である。日本産食品も日系の飲食店も多い。状況を注視しつつ、本県産食品のＰＲを着実に行っていきたい。

また香港大手旅行会社では、情勢不安や費用増の影響で、中東、欧州方面の予約が大幅に減少。代わって人気なのが、高速鉄道で行くことのできる長江など中国本土の観光地だそうだ。

日本行きは幸いにも好調を維持しており、元来の関心の高さに加え、近距離で航空券の値上げ幅が比較的小さいこと、そして円安が主な要因だという。

【EGL Travel Carnival のステージイベントの様子=４月 26 日、香港・将軍澳】

実際、４月 25、26 日に行われた旅行会社ＥＧＬTours（東瀛遊）主催のイベントには、日本から日本政府観光局（ＪＮＴＯ）や本県などの自治体、民間企業の他、中国本土からも多数のブースが出展、いずれもにぎわいを見せた。ＥＧＬは創業者の袁文英氏が逝去され、スティーブ会長の下で新体制となったが、勢いは変わらない。

円安に原油高の中でも、商機はある。事態の好転を祈りながら、本県の魅力を売り込んでいきたい。

県香港事務所長　鈴木高明（すずきたかあき）